

社会的学習理論の四機能図式 — モデリング・心の理論・社会化の理論的統合 —

木谷 滋

1. 「過剰社会化」人間観という批判

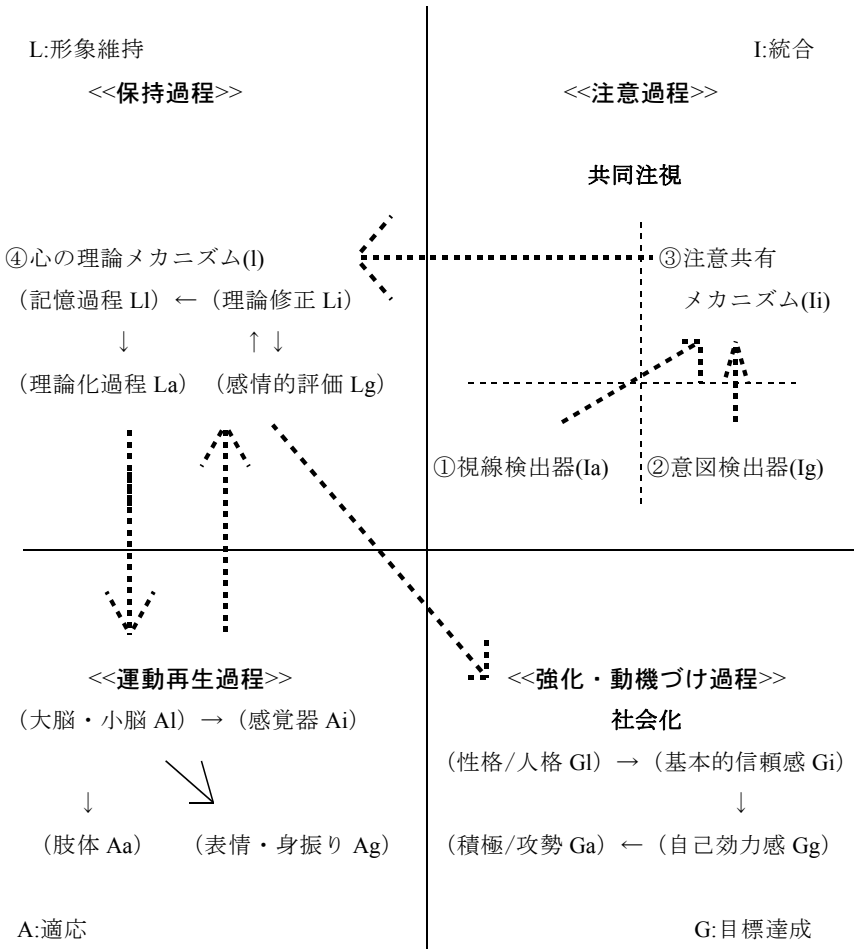
この小論では、タルコット・パーソンズ（Talcott Parsons）の社会化理論が克服すべき課題を指摘し、社会的学習理論（モデリング）や心の理論をとり入れた筆者の修正案を提示し、その修正案を自閉症者のライフヒストリー分析により検証する。石飛和彦は、社会化理論の研究史におけるパーソンズ理論を重視している。「『社会化』なる概念が広い意味での人間形成に相当する概念として受け入れられるようになったのは、行動科学的な見地に立ってパーソナリティーを把握しようとする共通の概念枠が徐々に作り出された1940～50年代になってからである」。「『社会化』現象が社会学において特別な理論的関心の対象になりはじめたのがこの時期であるとするならば、『社会化論』はまさに、『行為の総合理論をめざし』たパーソンズの議論と同時に成立したと言えるのである」（石飛, 1993）。山村賢明は、1950～60年代の日本の社会化研究について、次のように総括している。「いずれもパーソンズのAGIL論を下敷きにして、価値（意識）の類型化とその内面化を結びつけて構想するところに、社会学的社会化理論の一つの方向性があるといえそうである」（山村, 2008:16）。パーソンズの社会化理論は、多くの社会学者たちに重視されていた。しかし、米国では、1960年代後半から、パーソンズの社会化理論への批判が現れ始めた。石飛は、パーソンズの社会化理論への批判者としてデニス・H・ロング（Dennis.H.Wrong）を重視している。「パーソンズが社会化の説明原理として『超自我の内面化』というフロ

イト由来の概念を導入し、しかもそれを最も単純な意味における『学習』ないし『慣習形成』概念に重ね合わせて図式化したことが、パーソンズ自身および（おそらくはそれ以上に）同時代の社会学者たちに『過剰に社会化された』人間観を抱かせた。「ロング以降の社会化論的研究はみなロング論文を引きながらパーソンズの機能主義的内面化論を批判してきたと言っても誇張にはならないであろう」（石飛, 1993）。

柴野昌山によると、パーソンズに代表される「社会化を社会性 sociality の形成過程とみる合意モデル」から、「自己を社会化する能力 competence の獲得とみなす解釈的モデル」へと、パラダイム転換があったという（柴野, 1986:59）。実際に、パラダイム転換があったのかは議論が分かれるであろう。しかし、多くの研究者は、パーソンズの社会化理論は「過剰社会化」人間観であり「合理モデル」であると考え、新たな別の社会化理論に流出した。柴野は、パーソンズの社会化理論への批判者として、ロングとバジル・バーンステイン（Basil Bernstein）を重視している。バーンステインの社会化論は、パーソンズの機能主義的社会化論を拒否していると柴野はいう。バーンステインにとっては、「アイデンティティの形成と獲得が社会化なのであるが、この社会化とは機能主義理論で言うような価値・規範の内面化ではなく、それ以上にシンボリックな過程なのである」と柴野はいう（柴野, 2001:23-24）。現在でも、一部の社会学者たちは、パーソンズの社会化理論を擁護し続けているが、有益な批判に対しても十分に応えていないのではないかと筆者に思われる。パーソンズの社会化理論への有益な批判を受け止め、必要な修正を加えつつ、理論的な完成度を高めていくべきではないかと筆者は考える。この小論は、そうした考えによる、ささやかな試みの一つである。

先天的な個性や性格に加え、社会的学習の蓄積や、社会的学習に基づく行為や経験の蓄積が、後天的な人格や性格の形成につながり、個人の社会化となると、著者は考えている。この小論では、パーソンズの内面化分析に基づく社会的学習の図式（図 1）を「2.社会化過程の理論仮説」で提示し、仮説を構築する。その図式が、社会的学習の分析および社会化過程の分析に有効であることを、自閉症者のライフヒストリー分析を通して検証する。

【図1:心の理論とモデリング・社会化】



2. 社会化過程の理論仮説

ここで「社会化(socialization)」の定義を再確認したい。パーソンズは社会化を「相補的な役割期待体系の作用にたいして機能的意義をもつあらゆる指向の学習」という (Parsons 1951:207-208=1974:211)。さらにパーソンズは、「社会化効

果とは、共通価値が自我のパーソナリティのなかに内面化され、自我と他我のそれぞれの行動が相補的な役割期待-サンクション体系を構成するにいたるように、他我（複数の他我）の役割にたいして相補的な役割のなかに自我が統合されることと考えられる」と述べている（Parsons 1951:211=1974:215）。

パーソンズの「パーソナリティの社会化」の理論を、分析ツールとして使用可能にするためには、修正が必要であると私は思っている。私が、パーソンズによる「パーソナリティの社会化」の理論に違和感を感じるのは、ジークムント・フロイト(Sigmund Freud)の精神分析学を取り入れているからである。フロイトの精神分析学がすべて間違っているとは言わないが、その多くに仮説が含まれていて、今日の研究では訂正しなければならない部分が多いと、私は思っている。それゆえ、フロイトの精神分析学の代わりに、「心の理論」や社会的学習理論を四機能図式に採用する。

サイモン・バロン=コーエン (Simon Baron-Cohen) は、自閉症の研究を通して、「心の理論」を提唱している。心に関する情報を、脳の一部が蓄積することによって、4歳頃になると、相手の心を読めるようになると、バロン=コーエンは主張している。バロン=コーエンの図式に、パーソンズの四機能図式を当てはめれば、「図1：心の理論とモデリング・社会化」の右上のI（統合）の下位システムになる。

バロン=コーエンによると、心を読む普遍的な能力の基礎をなしている四つの仕組みが人間にはある。①視線検出器は、第三者の行為者が何を見ているかということ解釈する。②意図検出器は欲求や目的という意図的な心の状態を解釈する。視線検出器と意図検出器は、二項表象である。二項表象とは、二つの対象（第三者の行為者と対象、ないし第三者の行為者と自己）の間の意図的な（すなわち心の）関係を表象することである。表象とは知覚的・具体的な外的対象像を心に思い浮かべることである。③注意共有メカニズムの機能は三項表象に関わる。三項表象は、第三者の行為者と自己と対象（第三のもの）の関係を表している。注意共有メカニズムは、第三者の行為者と自己とが、同じ対象に注意を向けていると認識していることである。具体的に言えば、親と子どもがいて、子どもが対象に指差しをして、子どもと親とが同じものに注意を向けているという認識が子どもにあれば、注意共有メカニズムが働いている。④「心の理論メカニズム」は、

他者の行動から心の状態を解釈するためのシステム、すなわち「心の理論」を用いるためのシステムである。心の理論メカニズムは「認知的な心の諸状態のセットを表象することと、心の知識のすべてを有効な理論に翻訳するという二重の機能をもっている」。I（統合）の下位システムである①視線検出器(Ia)と②意図検出器(Ig)とによる情報は、③注意共有メカニズム(Li)によって統合され、L（形象維持）の下位システムである④心の理論メカニズム(I)に送られ、分析される。バロン=コーエンによると、自閉症児の①視線検出器と②意図検出器の機能は、完全である。そのため、心を読む働きが自閉症児に不十分になるのは、③注意共有メカニズムに発達の遅れや異常があるために、④心の理論メカニズムに十分な情報が送られない可能性があるからである。あるいは、④心の理論メカニズムにも発達の遅れや異常があるかもしれないとバロン=コーエンはいう（Baron-Cohen, 1997:31-33,39,44-46,50-51=2002:66,67,79,86,87,88,90,96,98）。バロン=コーエンの心を読む四つの仕組みのうちの、I（統合）機能の下位システムである「①視線検出器(Ia)②意図検出器(Ig)③注意共有メカニズム(Li)」は、L（形象維持）機能の下位システムである「④心の理論メカニズム(I)」に直接的に制御されている。

いずれにせよ、第三者の行為者の視線と意図とを統合して理解しうる能力、そして自己と他者とが同じ対象を観察していると理解できる能力を獲得しなければ、心の理論を機能させることは出来ないということである。自己と他者とが同じ対象を観察していると仮定できるのは、自分と同じように他者も視線や意図を理解する能力があるという、客観的に思考する能力を身につけたことを示している。

アルバート・バンデューラ（Albert Bandura）は、モデリング（modeling）の理論構築に多大な貢献をした。モデリングは社会的学習理論や観察学習と訳されるが、これは、実際に個人が経験をしなくても、観察することによって社会的な知識を得ることができるという理論である。例えば、暴力的なテレビ番組を視聴ることによって、子どもが暴力的な行動をするということが実証されているが、これもモデリングによるものである。観察学習といっても、ただ観察するだけではない。成功したモデルを参考に実践したり、実践での成否を反省したりする。バンデューラは、「注意の過程」→「記憶保持の過程」→「行動産出の過程」→「動機づけの過程」という四段階の社会的学習（モデリング）の流れを提示している（Bandura, 1985:70）。

バンデューラのモデリング理論とバロン=コーエンの心の理論とは、パーソンズの四機能図式によって統合しようと私は考えている。図1を見ていただきたい。バロン=コーエンの①視線検出器(Ia)②意図検出器(Ig)③注意共有メカニズム(Ii)の3つは、バンデューラのいう「注意の過程」(I)に該当する。バロン=コーエンの④心の理論メカニズムは、バンデューラの「保持過程(記憶保持の過程)」(L)に該当する。身体の運動機能では、小脳(AI)のように大脳(L)のブランチが存在する。しかし、視聴覚(I)のような情報収集を担当する機能は、大脳(L)に直接つながっているように、「注意の過程」(I)は「保持過程」(L)に直接つながっていると考えるべきである。保持過程で「記憶の整理」(LI)や「理論化」(La)された行為のモデルは、バンデューラのいう「運動再生過程」(A)で実際の行為として行われる。(私見：観察したことをすぐに運動再生する場合には、理論化は省略されるだろう。)この「運動再生過程」(A)での結果が「保持過程」(L)にフィードバックされる。まず最初に、喜怒哀楽の感情をとまなう「感情的評価」(Lg)がなされる。成功か失敗かという単純な評価である。さらに、「理論の修正」(Li)が行われ、「記憶過程」(LI)に送られる。「理論の修正」(Li)は、「注意過程」(I)での観察、「保持過程」(L)での理論化、「運動再生過程」(A)での結果、というILAの三つを統合的に考えて行われる。また、「理論の修正」(Li)は「感情的評価」(Lg)にも再送される。さらに、保持過程(L)での「感情的評価」(Lg)が、「強化と動機づけ過程」(G)に、報酬および情報として送られる。例えば、試合に負けた(運動再生過程A)というマイナスの結果に悲しんでも(感情的評価Lg)、条件が悪かったとか自分が練習不足だったと考えれば(理論の修正Li)、自分の可能性を信じ直して(感情的評価Lg)、自信を失わずに、再び挑戦する意欲(強化・動機づけ過程G)を継続できる。

運動再生過程の下位システム(図1左下)は、「大脳・小脳AI」が情報の入出力の中心となり、「肢体の運動Aa」「表情・身振りAg」「感覚器Ai」という他の3機能を制御する。

パーソンズによると、課題遂行過程はAGILの順番になるという。これは、「運動再生過程」(A)→Lの下位システムの「感情的評価」(Lg)→「理論修正」(Li)→「記憶過程」(LI)という、A→Lg→Li→LI(A→g→i→l)の順と重なっている。

「強化と動機づけ過程」は、マイクロ（個人）における社会化の過程であるともいえる。柴野のいう「自己を社会化する能力 competence」（柴野, 1986:59）を、個人の成長につれて獲得していく過程である。マイクロ（個人）の視点からすれば、社会化は、社会的学習の下位システムであるといえる。性格・人格(GI)は生まれつき遺伝されるものと、環境によって後天的に形成されるものがある。自閉症は、生まれつきの個性(GI)といえる。幼少期に愛情が注がれば、エリック・エリクソン (Erik Erikson) のいう「基本的信頼感」が形成される (Erikson, 1968:105-106=1982:133)。「基本的信頼感」は Gi であり、幼少期に形成されれば、周囲や社会との協調が容易になる。さらに成長した段階では、自分の成功体験や努力、周囲の励ましにより、バンデューラのいう「自己効力」あるいは「自己効力感」(self-efficacy) が形成される。バンデューラによると、「自己効力感」とは、「自分自身がやりたいと思っていることの可能性に関する知識や考え」である (Bandura, 1985:103)。自己効力感(Gg)、あるいは逆の自信喪失などが積み重なり、人格や性格形成につながっていくと筆者は考える。人間は成長するにつれ、外部の環境に働きかける「積極・攻勢(aggressive)」(Ga)の機能が発達するようになる。他者への不信感を増幅させる虐待やいじめなどを幼少期に体験すると、「基本的信頼感」(Gi)が形成されずに、「積極・攻勢」(Ga)の「攻勢」(offensive)の方が先に形成され、肥大する可能性がある。

フロイトの精神分析を採用したパーソンズは、社会化が、L → I → G → A の順に行われるとしている。これは、課題遂行過程が、A → G → I → L の順に行われるというのとは逆になっている (Parsons&Bales, 1955:38-68=2001:67-105)。パーソンズのいうように、LIGA の順に発達する人たちもいる。そのような人たちは、社会に協調しやすい性格の人間となり、Ga は積極的(positive)な性質となる。マジョリティの人たちの多くは、LIGA(GIGiGgGa)の順に発達し、社会に協調的な人格が形成されるのだろう。しかし、L(GI) → A(Ga)の順に発達し、周囲の人間を警戒しすぎたり敵であると見なしやすい性格になると、社会とは協調しにくい。社会化は、L から他の 3 機能に、どの順序で発達するかによって、理論的にいくつかのパターンが考えられるだろう。パーソンズのいう LIGA 型 (図 1 で順をたどると、コ型)、幼少期に基本的信頼感が形成されない LAG 型 (L 型)、幼少期に基本的信頼感が形成された後、いじめや虐待などを経験した LIAG 型

(Z型)、幼少期の早期に虐待やいじめなど経験した後、幼少期の基本的信頼感を形成するのに間に合った LAIG 型 (H 型) などが考えられる。また、前期の 4 つのパターンのそれぞれに、自己効力感 G(Gg)が欠如したパターンが理論的に存在しうるだろう。LIG 型、LA 型、LIA 型、LAI 型である。

モデリングや心の理論形成には、AGIL の各機能の間で情報や成功・失敗の報酬が行き交い、AGIL か LIGA の順番どおりには必ずしもならないと考えるべきだろう。パーソンズは、情報がエネルギーを制御するサイバネティクス理論を四機能図式に採用してから、情報処理を担当する L の機能を重視していた。L → I → G → A の順番ではなくても、L が情報処理の中心となり、L が A・G・I の各機能へ直接的に情報の出入力や報酬のやりとりを行うと考えた方が、L の機能をより重要視しているといえる。各機能における情報や行為の評価、報酬などは L を経由し、最終的に G に蓄積され、性格や人格をつくるための情報やエネルギー、資源となる。社会化は G「強化・動機づけ過程」の機能で行われる。

自閉症者でない人たちのことを、「定型発達」あるいは「定型」と自閉症者は呼ぶことがある。対比として「障害者」を連想させる「健常者」よりも「定型発達」「定型」の呼称の方が、自閉症者にとっては違和感がないのであろう。

自閉症者自身が書いた文献を読むと、自閉症者の注意過程には特徴があることが分かる。定型の人は全体を見るが、自閉症者は細かい部分やある特定の部分に注意をして全体を認識することが困難である。逆に言えば、定型の人は、細かな変化を気にしなかったり、見逃してしまうことがある。顔の表情で喜怒哀楽を自閉症者は判断しにくいともいう。これは、バロン=コーエンのいう「意図検出器」が十分に機能していないということになる。無生物と生物との違いや、生物が欲求を持っていることを自閉症者が理解していることから、自閉症者の意図検出器に問題はない、とバロン=コーエンはいう (Baron-Cohen, 1997:63-64=2002:118-119)。また、千住淳の実験研究によれば、自閉症者は視線検出器の働きも弱いという (千住, 2007)。注意過程から保持過程への情報の入力に、自閉症者と定型の人との両者には違いがあるといえる。保持過程でも、違いが生じる。定型の人は他者の行為を観察しながら心の状態を想像できるが、自閉症者は他者の心の状態を想像することが難しく、表面的な行動を記憶する。理論化過程で、欠落していることによって、定型の人に比べ、自閉症者の社会的学習は不完全なものに

なる、と推測される。

3. 自閉症者のライフヒストリー分析

ここで、自閉症者自身による自伝や自閉症者の母親による著書を分析する理由は、研究者によるデータや論文などであると重要な事柄が捨象されているおそれがあることと、社会的文脈を筆者は重視しているからである。

藤家寛子による自伝や諸著作は、自閉症者のライフヒストリーとして非常に興味深い。成人するまで自閉症と分ならず、さらに二次障害として解離性人格障害を発症した。マイノリティへの教育や社会のあり方を考える上で、彼女の成長過程は大いに示唆を与えてくれる。藤家は、1979年、佐賀県に生まれる。実在の他者やテレビの出演者の行動を真似するモデリングを行ったという記述が、自閉症者たちの自伝にみられる。藤家の幼少時のモデリングの対象は、テレビ・アニメとして放映していたバーネットの『小公女』の主人公セーラであったという。幼少時、彼女は祖父から大きな影響を受けた。祖父は米軍の佐世保基地で通訳をしていた。祖父が生きていた時の、規則正しい、寄宿学校のような生活は、彼女にとって心地よいものであったという。彼女が4歳半の時、祖父は他界した。4歳半の時に亡くなった祖父のことを鮮明に記憶しているのは、自閉症の特徴であろう。祖父の死後、祖父によって教えられた欧米的な教育方針と、父の日本的な教育方針とは、大きなギャップがあった。幼少時に祖父から欧米文化を受け入れていた彼女は、あらためて父から日本の文化を受け入れることは困難であり、家庭でもストレスを感じることになる。最初に受け入れたルールなどを変更することが困難なのは、自閉症の特徴の一つである。小学1年生までの彼女は「セーラ」のモデリングを続けていた（藤家, 2004:14-20）。その後、彼女は、実在する人間のモデリングをするようになる。「目で見えるものを真似して自分のものにすることは、とても簡単でした。しかし、目で見ることのできない人間の『気持ち』を真似することは、いかに芸達者な私の性質を持っても困難なものでした。想像することはできても、私には実感が追いついてきませんでしたので、どうしても少しズレたものになってしまうのです」（下線部ママ）と藤家は述べている（藤家, 2004:22）。自閉症者が、上手に他者の真似ができ、気持ちを理解せ

ずにモデリングを再現して違和感を他者に感じさせることが、ドナ・ウィリアムズ (Donna Williams) や他の自閉症者達の自伝にも書かれている (Williams, 1992)。言葉については「意味がわかっていなくても『テレビの人が言った』って感じて使うようになる」と藤家は述べている (藤家/服巻, 2006:59)。

小学4年生の時、解離性人格障害を藤家は発症する。仮想の人格を騎士に例え、盾となって自分を守ってくれたと藤家は言う。しかし、「自分にメリットがあるかないかだけで物事を分けてしまう彼女と、ロマンティストの私」とは、しばしば対立することもあったという。藤家は、この仮想の人格を「古都子」と仮名している。大学1年の夏の一時期、藤家は入院をし、22歳の時、解離性人格障害から目覚めたという。その間、うつ病状態であった (藤家, 2004:25,28,205-208)。ウィリアムズも解離性人格障害を発症していたことを自伝に書いている。ウィリアムズの場合、他者との協調を志向するキャロルという女性の人格と、他者に強制力を働かせるウィリーという男性の人格と、二つの人格をつくり出し、場面に応じて、それぞれの人格がウィリアムズの代行をしている。パーソンズの四機能図式では、キャロルはI (統合) の機能で協調的な性格、ウィリーはA (適応・エネルギー最大) の機能で積極的・攻撃的な性格を持っていたといえるだろう。藤家の場合の「古都子」は、ウィリアムズのウィリー (「積極・攻勢 (aggressive) Ga) のような役割を果たしていたと言えるだろう。解離性人格障害を発症したという共通点が、藤家とウィリアムズとにある。両者とも、成人になるまで自閉症と診断されず、家庭や学校などで適切な対応や教育的配慮がなされず、強いストレスのもとにあった。本人の理解や精神的緊張の限度を超えた人間関係などに適応するために、仮想の人格を生み出したという共通点が、両者にある。強いストレスやトラウマがあった場合、自閉症でない人も、解離性人格障害を発症することもある。町沢静夫によると、解離性同一性障害 (多重人格) を発症するのは、女性の方が男性の5倍以上多いという (町沢, 2003:23-24)。

自閉症者が、そうでない定型の人たちよりも解離性人格障害を発症しやすいのかどうかは、筆者には分からない。藤家とニキ・リンコとの対談で、定型の人たちより、自閉症者は、人間関係によるストレスだけではなく、肉体的なストレスも、強く感じていると訴えている (ニキ/藤家, 2004)。自閉症者への配慮がなされない場合、心身共に、定型よりもはるかに強いストレスを感じる可能性が高い。

藤家やウィリアムズの場合、解離性人格障害を発症していた時、本人に代行して、仮想の人格が、「運動再生過程」を行っていたといえるだろう。本人の意思や欲求に反した行為を、他者から要求あるいは強制された場合、仮想の人格が本人に代行し、その場を切り抜ける。ウィリアムズの場合、他者との協調が必要だと判断すれば愛想の良いキャロルが代行し、他者との対決や危機的な場面だと判断すればエネルギーにあふれるウィリーが代行する。藤家の場合、彼女の幼少時の人格形成に大きな影響を与えたのが、『小公女』の主人公セーラであった。セーラは、藤家にとって親近感のあるキャラクターで、本人の性格にも近い。他者との関係に果たす機能的役割から見れば、ウィリアムズの仮想人格のキャロルに近い役割を、藤家自身あるいはセーラが担っていたと言える。しかし、ウィリアムズの仮想人格キャロルは、わざとらしさや違和感を他者に感じさせたせいか、受け入れられたり愛されたりすることは難しかった。藤家自身あるいはセーラも、他者から理解されたり受け入れられたりするのには難しかった。藤家の仮想人格の古都子は、自己保存の必要性から生み出されたと筆者は推測する。藤家もウィリアムズも、内面的欲求として「他の誰かになりたかった」というより、外部に適応するために否応なく仮想の人格を生み出したように、筆者には思える。はじめに、オリジナルの自己が他者に受け入れられないので、他者から好まれそうに思われるキャラクターのモデリングを両者は行った。それは、本来の自己を失いかねない危険な行為でもあった。しかし、両者とも、他者から受け入れられたり、愛されたりするのは難しかった。次に、他者の不当と思われる要求や圧力に対抗するため、道具主義的なエネルギーにあふれる仮想人格を、両者とも形成することになる。

他の諸著書で藤家は、解離した理由をこう述べている。「自分の思いよりも先につねに先に」他者から「キャラクター化されている自分がいて、それが強くなりすぎて解離が起きたんだと思っています」。「私も、周囲の期待をずしりと受け止めて、なんとかそれに応えようと思いました。その結果私がとった手段は、別の人格を生み出す、ということだったようです」。「要するに、素のままでは生きていけなかった」。「素の自分では全部受けているのがきつすぎて、解離してしまったのだと思います」（藤家/服巻, 2006:61-62. 藤家, 2007:144. ニキ/藤家, 2004:176）。学校や職場など、素のままでは、うまくいかず、自分とは違うキャラ

クターを演じたり、さらに、他者から期待されるキャラクターを演じることは、定型の人にもあるだろう。しかし、藤家の場合、心身共に、非常に強いストレスを感じていた。

前出ではあるが、パーソンズは、社会化を「相補的な役割期待体系の作用にたいして機能的意義をもつあらゆる指向の学習」と定義し、「社会化効果とは、共通価値が自我のパーソナリティのなかに内面化」されることだという（Parsons, 1951:207-208,211=1974:211,215）。藤家は、他者からの役割期待をどのように理解したのだろうか。藤家は、祖父から欧米的な文化の価値観を教えられた。自閉症という個人的特性と同時に、文化的にもマイノリティの価値観を幼少時に内面化したといえる。藤家は、声や表情から伝えられる意味を理解することが苦手であるという。家族の中で、どのような役割を期待されているかとか、その場その場の状況で他者が何を期待しているかを理解することは、藤家には難しかった。また、藤家には、周囲の期待に真面目に応えようとしすぎる傾向や、周囲が藤家に期待しすぎる傾向もあった。自閉症は、他者の意図を理解する能力の低さが注目されるが、それ以外に身体能力や知能での得意不得意のアンバランスが顕著な人も多い。ある特定の分野が得意であったり、サヴァンと呼ばれる天才的な才能を示す自閉症者もいる。自伝によると、藤家は音楽に才能があり、ドラム演奏で天才児と思われたことから、過剰な期待を周囲は抱いたそうである。学校では、優等生であることを教員が期待し、苦手である体育の時間で頑張ることは強制的であった。小学校時代は、優等生と思われていることへの嫉妬心などから、いじめの対象とされた。小学校3・4年生の2年間にわたる団体縄跳びは、運動が苦手な虚弱体質でもあった藤家にとって大変苦痛であったという。中学校時代は、性別の概念や男女生徒への対応の仕方を変えることを理解できなかったことも原因の一つとなり、いじめられたそうである。中学生時代には、普通になりたいという欲求も起こり、失恋や片思いのふりを演じることもあった。しかし、普通になりたいという気持ちは、高校生になると消えたという。虚弱体質であった藤家は、ブルース・リーのようになりたいと思っていた時期があったという。高校時代になると、得意科目と不得意科目との成績の差が歴然とあらわれるようになった。うつ病やパニック発作、解離性人格障害に悩まされていたという。彼女の人生において、精神的な病気だけでも、うつ病、パニック障害、対人恐怖症、異常

潔癖、PTSD、解離性人格障害を発症したそうだが、その多くは二次障害であろう。2002年（23歳頃）の冬、アスペルガー症候群であると、藤家は診断された。性格診断テストでは、「行き過ぎた道徳観があります」と評価されたという。幼少時に祖父から教えられた「約束は守ること」「礼儀正しくあること」という行動指針を、その後も藤家は堅持し続けたといえる（藤家, 2004:79-82,33-46,110-111, 126,134,17. 藤家/服巻, 2006:52-54）。

星空千手と息子のRとは、母子ともにアスペルガー症候群である。千手は、著書のなかで、こう述べている。「私と息子の運命を大きく分けたのは、幼少時に築いた土台なのではないかと思う。Rは3歳過ぎに『広汎性発達障害』（当時）という診断名が付いた」。千手は、20代の終わり頃、息子のRと同時にアスペルガー症候群と診断された。母子通園施設に入り、「Rはここで『愛される』『歓迎される』という状態を体感し、自分のものにしたのだと思う。私が幼い頃に得られなかったものを、Rは体中で吸収したのだ」。「私は、人生のかなり早い時期に、『人間はおおむね敵だ』とってしまった」。それに対し、Rは「『周囲の人間はおおむね仲間だ』と感じているようだ」。「ちょっかいをかけられたことが、『いじめられた』という被害意識に直結しないのがR流なのだ」と、千手はいう。「おかあさんが、ぼくをきびしくしかるのは、ぼくのためをおもってきびしくしかっているんだよね？」と息子のRは母の千手に言ったことがあるそうである（星空, 2007:191-196）。前出のように、エリクソンは、幼児期に基本的信頼感を培うことの重要性を説いている（Erikson, 1968:105-106=1982:133）。これは自閉症者にも当てはまることだといえる。他者の意図の解釈に、基本的信頼感という感情的な要因が影響を与えていることも注目される。

幼少時に早期診断され、適切な支援が行われた例として、貴重な示唆を与えてくれるのが、明石洋子の諸著作である。1971年11月29日、明石の長男の徹之は誕生した。2歳10カ月の時、「アティピカル・チャイルド」（発達にズレがある子）と診断された。その後、3歳の時、「自閉的傾向」と診断され、8歳の時、「小児自閉症」と診断された。1970年代半ばの当時は、専門家さえ、どのように自閉症児を支援して良いのか、よく分かっていない状況であった。洋子は、専門家の意見を参考にしながら、独自に工夫をして、徹之を育てていった。徹之が2歳9カ月の時、次男の政嗣が生まれ、この弟が大きな役割を果たすこと

になった。「徹之は、私のことばを理解することや、私の動作を模倣することはできなかったのですが、政嗣のことばを理解したり、政嗣のやることを模倣するのは少しはできたようで、政嗣のそばにいるのが一番安心のようでした」。トイレでの排便の仕方も、弟の政嗣を手本にして、徹之が小学校に入学するまでには、マスターできたという（明石, 2003:45,94-95）。徹之が小学校2年生の時、明石一家は、佐賀県に移住することになった。佐賀県の小学校の担任は、徹之に理解のある教員で、徹之は、クラスメイトと良好な人間関係を築くことができる小学校時代を過ごすことが出来た（明石, 2002:118-143）。高校1年生の時の担任は、入学間もない4月20日の連絡帳にこう書いている。「今日は新入生歓迎会で徹之君は終始楽しそうに全体の輪の中に入っていました。……帰りに、『明石君さようなら』と声をかけましたら、笑って『さようなら』と応えてくれました。その表情の楽しそうなこと、印象的でありました」（明石, 2005:95）。小学生の時期を含む幼少時に、他者への基本的信頼感(Gi)を培ったことにより、青年期の性格や人格に他者への信頼が備わっていたと言える。母の洋子の言葉によると、定時制高校の頃の徹之について、弟の「政嗣は『自分が一回勉強して覚えることを、兄貴は100回くり返し勉強して覚えている。俺の何倍も努力をしている』といつも感心している」という（明石, 2005:128）。自己効力感(Gg)が備わっていたといえる。1993年7月に、徹之は川崎市の職員に採用された。仕事を始めて4か月後、職場の仲間は、「明石君は、性格もまじめで、明るく、人の話をよく聞き、一生懸命働きますし、職場を明るく、楽しくしてくれますよ」と評価しているという（明石, 2005:148）。社会や対人関係に適応できる積極性(Ga)を身につけているといえる。

4. 社会化過程の理論仮説検証と「過剰社会化」社会

これまでの、自閉症者のライフヒストリー分析によって、下位システムの検証までは出来なかったが、ILALGという社会的学習のおおまかなシステムの流れは確認できたと筆者は考えている。

浅見淳子との対談で、藤家は、こう語っている。「私も人の真似をしたり、人の会話を聞きながら『こういう反応やっているんだ』と覚えていっています。人

から言われて取り入れて自分流にカスタマイズしていくことで、うまく生きられるようになってきた気がします」(藤家/浅見, 2009:163)。図1の、I:「注意過程」真似・会話で情報収集→L:「保持過程」覚える→A:「運動再生過程」→(フィードバック)→L:「理論修正」カスタマイズ→G:「強化・動機づけ過程」(自己効力感)「うまく生きられるようになってきた」、というサイクル(ILALG)の社会的学習を藤家も行っていると言えるだろう。

「注意過程(I)」の下位システムとして想定した共同注視のシステムは、その仮説をバロン=コーエンが提唱した後に、多くの研究者達によって検証されている。前出の千住の研究もその一つである(千住, 2007)。「保持過程(L)」 「運動再生過程(A)」で想定した下位システムの仕組みは、常識的に推論して仮定したものである。「強化・動機づけ過程(G)」は個人(ミクロ)での社会化のシステムである、と筆者は仮定した。藤家の社会化のパターンは、自閉症という個性(GI)を持って生まれ、幼少期に基本的信頼感(Gi)が形成された後、いじめや強い対人的ストレスなどに対応(自己防衛・対抗)(Ga)し、成人後に自己効力感(Gg)を形成したLIAG型(Z型:個性L(1)から始まり、経験や学習の蓄積IAGにより、人格と性格L(2)を形成するとすればL1-I-A-G-L2型)といえる。明石徹之は、パーソンズがいうLIGA型(L1-I-G-A-L2型)の発達パターンといえる。「強化・動機づけ過程(G)」の下位システムについての検証は、今後も、筆者の課題としたい。

自閉症者のライフヒストリー分析で検討したことをまとめれば、自閉症者も、モデリングによる社会的学習を行えることが分かる。社会的学習が不得意だと思われる自閉症者も、モデリングを行っていることから、社会的学習にモデリングは基本であると考えて良いだろう。

対人関係を含まない行為では、何の問題もなく、他者の行動を学び、自分の行動の役に立てることができる。なぜ、対人関係を含むと、うまくいかないのだろうか。自閉症者自身の著作から推測される主な理由として、次の二つがある。まず、情報量の問題である。声や表情から感情を理解することが難しいので、理論化に必要な情報の蓄積が十分な量に達しないからである。次に、理論化の問題である。他者の気持ちを想像するのが困難であるというように、心の理論メカニズムの能力が低いためである。自閉症者は、外見の目に見える行為は理解できるが、他者の目に見えない内面の気持ちを理解することが困難である。千住によると、

「心の理論」の障害は、自発的に社会的な情報に注意を向けるための「社会的注意や動機づけの障害」と強く関連しているという（千住, 2009:276）。

社会的学習での、自閉症者と定型の人たちとの違いは、わずかであると思われる。そのわずかの違いが、社会的学習の結果に大きな差を生んでいる。自閉症者たちの自伝を読むと、定型の人たちからすれば想像を絶する勘違いや思い込みをしており、それが正しい対人的な理解や適切な社会的行為を妨げていると思われる。正しい対人的な知識が身に付くようにアドバイスを与えたり、適切な対人的行動がとれるようにソーシャル・スキル・トレーニング(sst)が行われれば、自閉症者の社会的学習の成果も上がっていくだろう。支援や訓練によって、前出の千住がいう「社会的注意や動機づけの障害」を克服することが可能であることも確認されている（千住, 2009:275-276）。

幼少期に自閉症であると早期診断がされた人たちは、周囲から適切な配慮と支援がなされた場合、基本的信頼感が形成され、社会と協調的な性格・人格になっていくことが確認された。また、基本的信頼感は、「心の理論」が行う他者の意図の解釈に、影響を与えることも確認された。

藤家は、自閉症や発達障害の早期診断や特性に配慮した教育を、諸著作や対談を通して訴えている。彼女自身、学校や家庭で、ストレスの多い生活を過ごした経験から、発達障害の早期診断がされ、配慮の行き届いた教育が行われれば、二次障害を起こすことが防がれるという思いが藤家にはある(藤家, 2007)。成人後、アスペルガー症候群であると診断された藤家は、支援プログラムを成年になって受け始めた。藤家の諸著作では、支援プログラムが効果をあげ、心身共に健康になり、本人にとって好ましい社会との関わりを築いていく様子が述べられている。早期診断が望ましいことは言うまでもないが、成年後も社会や人間関係への認知は発達することを示している。藤家が、自伝を書いた理由の一つに、自閉症者への世間の誤解を無くしたいという思いがあったという。藤家は、早期診断の重要さや、発達障害に対する教育の充実を訴えることによって、社会の価値観や制度が変化するよう働きかけている。

他者から期待される「社会的な役割（機能）」を獲得しようとしたり、規範や道徳などの社会的な価値観を内面化するという現象は、マイノリティにも存在し、パーソンズの機能主義的な社会化理論を完全否定する必要はない。マジョリティ

に期待される役割や価値観をマイノリティが受け入れようと無理をして苦しむということは、逆に、パーソンズの社会化理論が現実の人間の行為に当てはまっているということを示している。ロングは、パーソンズの社会化理論を「過剰に社会化された人間観」であると批判した(Wrong, 1961)。しかし、「過剰社会化」を個人に強制する社会は現実である。パーソンズの社会化理論を批判するより、「過剰社会化」社会が現実であることを認識して、現実の社会を変えていく試みを私たちはしなければならない。社会が個人に加える社会化の圧力は、非常に強力である。しかし、個人は、社会に対して受動的であるだけではなく、能動的に働きかけることも出来る。藤家も過剰社会化に苦しんだ後に、社会の変革を訴えている。

引用文献

- 明石洋子, 2002, 『ありのままの子育て 自閉症の息子と共に①』ぶどう社。
———, 2003, 『自立への子育て 自閉症の息子と共に②』ぶどう社。
———, 2005, 『お仕事がんばります 自閉症の息子と共に③』ぶどう社。
- Bandura, Albert, 1985, (重久剛他訳) 「第Ⅱ部 最近のバンデュラ理論」 祐宗省三 他編『社会的学習理論の新展開』金子書房:55-154. (1982年のBandura 来日講演を基に出版。Bandura の講演原文は未公開と思われる。)
- Baron-Cohen, Simon, 1997, *Mindblindness*, The MIT Press. (= バロン=コーエン,S, 2002, (長野敬他訳) 『自閉症とマインド・ブライントネス』青土社。)
- Erikson, Erik H., 1968, *Identities: Youth and Crisis*, W.W.Norton & Company, Inc. (= エリクソン, E.H, 1973, (岩瀬庸理訳) 『アイデンティティ 青年と危機』金沢文庫。)
- 藤家寛子, 2004, 『他の誰かになりたかった 多重人格から目覚めた自閉の少女の手記』花風社。
- 藤家寛子/服巻智子, 2006, 「自閉っ子、故郷に生きる」服巻智子『自閉っ子、自立への道を探る』花風社:23-88。
- 藤家寛子, 2007, 『自閉っ子は、早期診断がお好き』花風社。
- 藤家寛子/浅見淳子, 2009, 『自閉っ子の心身安定生活』花風社。
- 星空千手, 2007, 『わが家は自閉率 40% アスペルガー症候群親子は転んでもただでは起きぬ』中央法規。
- 石飛和彦, 1993, 「『社会化論』的問題設定について」『京都大学教育学部紀要』No. 39, pp.382-392. 京都大学教育学部(1993/3/31).
(internet で閲覧可能。 <http://www2s.biglobe.ne.jp/~ishitobi/syakaika.htm>)

- 岩永竜一郎/藤家寛子/ニキ・リンコ, 2008, 『続 自閉っ子、こういう風にできています!』花風社.
- 町沢静夫, 2003, 『告白 多重人格 わかって下さい。私たちのことを』海竜社.
- ニキ・リンコ/藤家寛子, 2004, 『自閉っ子、こういう風にできています!』花風社.
- Parsons, Talcott, 1951, *The Social System*, The Free Press. (=パーソンズ,T, 1974, (佐藤勉訳)『社会体系論』青木書店.)
- Parsons, Talcott and Bales, R.F.(eds), 1955, *Family:Socialization and Interaction Process*, The Free Press. (=パーソンズ,T/バールズ,R.F, 2001, (橋爪貞雄他訳)『家族 核家族と子ども社会化』黎明書房.)
- Parsons, Talcott, 1964, *Social Structure and Personality*, The Free Press. (=パーソンズ,T, 2001, (武田良三監訳)『新版 社会構造とパーソナリティ』新泉社.)
- 千住淳, 2007, 「自閉症における視線処理の非定型的発達：発達認知神経科学的視点からの検討」『心理学評論』2007, Vol.50, No.1:13-30.
- 千住淳, 2009, 第12章「自閉症児は心が読めない? : マインドブラインドネス仮説再考」開一夫/長谷川寿一編『ソーシャルブレインズ』東京大学出版会:265-281.
- 柴野昌山, 1986, 第2部「人間形成の社会学 解説」柴野昌山・麻生誠・池田秀男編集『リーディングス 日本の社会学 16 教育』東京大学出版会:57-60.
- , 2001, 第1章「文化伝達と社会化：パーソンズからバーンステインへ」柴野昌山編『文化伝達の社会学』世界思想社:2-57.
- Williams, Dona, 1992, *Nobody Nowhere*, Jessica Kingsley Publishers. (=ウィリアムズ,ドナ, 2000, 『自閉症だったわたしへ』新潮文庫.)
- Wrong, D.H., 1961, "The Oversocialized Conception of Man in Modern Sociology," *American Sociological Review* vol.26,no.2,1961,pp183-193.
- 山村賢明, 2008, 1章「社会化研究の理論的諸問題」『社会化の理論』世織書房:5-25.